

「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ ― 神戸の大空襲の後、戦火を避けるため、きみたちは、実家のある広島へ疎開した。昭男は1人神戸の家に残り、軍隊に志願できる時期を待った。だが、戦況はますます終局に向いつつあり、周りでは「沖縄に米軍上陸」との話までささやかれた。そんな中昭男は次第と焦りと不安を深めていった。―

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp)

5. 父親

昭男の父の治一(はるいち)は、昭男と30才違いの典型的な明治生まれの一本気な気質だった。結局それはやはり昭男にも引継がれているのだが、それにけい^はやはり気丈な母さめと何かと折合いが悪く、いつもぶつかつては口論が絶えなかった。

父は市中を廻っては、古道具や木材などを殆どただ同然で集め、それを近所や身内に売ったり、修理寺を手伝ったりして、日銭

稼ぐ仕事をしていた。いや「仕事」などと呼べる立派な事でもなかったかも知れない。そのくせ毎日酒浸りになっては、気に入らない事があれば我が者勝手に振る舞い、声も手も上げる態度に、さめはもつ「めさめさ」^をしていた。中にも昭男はいつ

父と母との間に入ってはそのとばかりをまともに受け、

それでも何も出来ず、無力さを痛感しては父を疎んじた。また、父は二日酔いや気が進まない日には昭男を学校へも行かさず、自分の代わりに「仕事」に走らせる事もしょつ中につた。そんな日はたいがい酒を買いにも行かされた。そんな父に「しさ」使われる昭男の姿

見く任事先や酒屋の土人達は同情し、何かと便宜^をを凶つくられたりもした。昭男はにからしそんな中で成長し生きていく「術」^をを、身に付けていった。

そんな父親だったが、彼にも彼なりの境遇がその人生に大きく横たわっていた。奈良のちょっとした田畑(でんばた)地主の4男として生まれたものの、土地を継がせ様にも上の3人の兄弟とも健在で、分け与えられるものはなく、尋常小学校を出るとすぐに遠縁の冶金職人の家に養子に出された。と向もなくその家に跡取りの長男が生まれ、その内煙に^にかられる様になると半ば追い出される様に家を出た。



それからというもの、20年近く浮浪生活が続き、その耐え難い「苦痛」は、言葉に尽せないものだったに違いない。大人たちの勝手な都合で「物」の様に扱われる憤り、地位や財産を持たぬ者は、どう足掻いても社会の底辺にしか置かれない不正義、一部の権力者だけが国を牛耳り、好き勝手に国民を虐げる理不尽さ。次第に治一は社会主義思考、軍国主義批判の気持ちに流されて行く。

そんな頃、雑役の仕事をしていた大阪の旅館で、住み込みで下働きとして雇われていたきみと知り合い、その内所帯をもつ様になる。父が「おれは最初から居らんかったもんと思え。」一方的にそう言い残して突然家を出て行ったのはそれから15年後。去年の夏の事だった。「戦争がいやで、本土決戦の前に出奔しよった。」近所の人々は口々にそう噂した。「恥や、非国民や」昭男は本気で父を憎んだ。

(つづく)